

【僕】「ラビビツ…マスターアルトリアさんのダブルピース…」

この世の者とは思えないほど可愛い…まあ実際、普通の人間じゃないんだけど…」

僕は目の前に立つ金髪の美少女を見て、うっとりしていた。

目の前にいるこの美少女は、童貞で二十台でキモオタの僕が、ずーっと恋焦がれていた、マスターアルトリアさんその人なのだ。



【僕】「しかもこの美少女が、

今の僕の体なんだよなあ…」

こんな美少女が、あんな事やこんな事をしてたなんて…」

僕は部屋に設置した大きな鏡を凝視しながら、あれこれとポーズを変えつつ呟いた。

そう、僕は色々あって、Fateに登場するアルトリアと同じ見た目の体を手に入れたのだ。


しばらく前。僕はマスターアルトリアそっくりのラブドールがあるの聞いて、
とあるアダルトショップの店へとやってきた。



原作を再現しつつ、生身の人間同様の質感を持つラブドール。
しかし非情に高額であり、僕の所持金では購入は難しいと悩んでいた所、
店主は一週間レンタルの話をもちかけた。



そして僕がラブドールをレンタル契約をした所、
驚くべき事に、僕の魂がそのラブドールの中に入ってしまったのだ。



しかし、店を出てすぐだ。僕はナンデラに捕まのりインプされてしまった。
だが、そのおかげで女の体でのセックスの
気持ち良さに気づくことができた。



僕は二週間という限られた時間の間、その快楽を堪能しようと思った。

アルトリアさんの体で外出しチャホヤされる気持ち良さを味わい、
そして電車に乗れば痴漢に会い、膣を徹底的にかき回されてしまった。

さらにアルトリリアさんの体を堪能するため、
アダルトショップでコスプレ衣装を購入。

ついでにクスコも購入し、店員と客に子宮まで
見せつけた後、彼らに中出しさせてやった。

自宅に帰ると、魂を失った僕の本体が眠っていた。
眠っていても勃起はするらしい。僕はひらめいた。

折角なので、憧れの相手に筆下ろしをして、童貞を卒業する事にした。



調子に乗った僕は、さらに注目を集めるために、
競泳水着姿での外出を決行する。

案の定注目を集めたので、
柔軟体操という名目でオマニコを広げて見せつけてやった。

その時の男達の案内で、成人向けのコスプレイベントに参加。
メイドオルタのコスプレで、男達を犯す様子を撮影させてやった。

こうして僕は、この体を堪能しつくしたのだった。



しかし、あまりに堪能しつくした結果、レンタル期限の二週間を過ぎてしまう。

その罰則として、僕は元の男の肉体を売却し、このアルトリアさんの体で生きていく事になってしまった。

とは言え、これは僕にとっては願ったりかなったりだった。童貞キモオタの本体には未練は無かった。

そして僕は、マスターアルトリアさんとして、第二の人生を歩み始めたのだった。



【僕】「…思い出してたら、ちよっと興奮してきたな…♡」

僕は色々思い出しつつ、鏡に向かってスカートをめくりあげると、ノーパンの割れ目が露になる。その清楚に見える割れ目の奥には、いったい何人分の精液がため込まれているのか。それを考えると、興奮でドキドキし、再び子宮の中に精液を流し込まれたいようになってしまう。それがこの体「ホムンクルス」の性質である。

僕が得たマスターアルトリアの肉体は、ラブドールではなくホムンクルスだった。

ホムンクルスは原作のFateに出てくるのだが、この肉体は原作とは大きな違いがあった。それは、このホムンクルスの肉体を維持するためには、強力な生命エネルギー、

すなわち新鮮な精液を定期的に子宮に流し込んでやる必要があるのだ。

いかに美少女の肉体に得ても、男とセックスし続けるなんて…そう考える人の方が多数派だろう。だからこそ、こんな美少女の肉体ではなく、僕の本体を買い取る人がいたというわけだ。



僕の元の肉体を買い取った金持ちは、年老いた肉体から、僕の肉体に魂を乗り換えたのだった。そして僕は、ある条件と引き換えに、金持ちから資金援助して貰う事となった。その条件は、現役の子学生として生活し、変態行為を行い、それを配信する事だ。

確かに金持ちにとつては、本人も若返りつつ、

美少女の変態行為を堪能できる、

一石二鳥の良い手段なのだろうと思う。

僕自身も、美少女として生まれ変わり、

気持ちいい事でお金も貰えて、一石二鳥だ。

こうして利害が一致し、僕は僕の本体を買い取った金持ち！

マスターの指示に従い、本物のJKとして、学園生活を送る事になるのだった。



自分の姿を見てオナニーしたくなったが、なんとか我慢して外出した。今日は僕が通う学園の初登校日であり、遅刻は許されない。変態行為を配信するだけなら、別に今更学校に通う必要は無いのだが、本物のJKの変態配信が見たいというのが、マスターの望みだ。僕は周囲の通行人や学生たちから注目を集めつつ、学校へと移動した。



【男子】 「うわっ…あの子めちゃくちゃ可愛い…あの子が編入生？」

【女子】 「そうじゃないのかな…最近、日本国籍を取得した海外の子とかいう話だし！」

【男子】 「しかも、今話題の若手社長が身元引受人だろ？ この学園の理事長になつたって言う！」

やはりマスターアルトリアさんは美少女だ。一瞬で生徒たち全員の噂になった。

しかも、マスターは経営困難な状況にあった、この私立学園を買い取って理事長になっている。その理事長が僕の身元引受人なのだから、目立たないはずがなかった。

僕は生徒たちの視線に晒される気分の良さを味わいつつ、手続きのために校長室へと向かった。

【僕】「今日からこちらに編入する、アルトリア・ペンドラフォンです。よろしくお願ひします」

【校長】「よろしくアルトリア君、私がこの学園の校長だ。君の国とは文化の違いもあるだろうが、

出来る限り君の国の文化を尊重するようにと、理事長からじぎじきに頼まれているよ」

そう言っつて校長は、媚びるような視線を僕へと向けた。

明らかに理事長であるマスターの事を意識している。

【校長】「…それにしても、スカートが短すぎるのではないかな？」

一応、わが校には下着が見えるようなミニスカートは禁止という校則がある。

…ただ、それが君の国の文化であれば、許可する事もやぶさかではないのだが…」

そう言っつて、校長は僕のスカートと、そこから伸びる白い太ももを、いやらしい笑みを浮かべ眺める。

なるほど、マスターが僕の国の文化を尊重しようと、校長にくぎを刺した理由が理解できた。

つまり、この学園内で生活しつづ、文化の違いを盾に変態行為を配信するという事なのだろう。



【僕】「下着が見える長さがダメという事であれば、特に問題ないかと思えます。
我が国の文化では、未婚女性は下着をつけない事が普通ですから」

そう言うって僕はスカートをめくりあげ、ノーパンの下半身を校長と監視カメラに見せつける。
この学園がマスターの支配下にあるなら、監視カメラを通して僕の様子を見ているはずだから。

【校長】「おお!? の、ノーパン!？」

確かにそれなら校則違反ではない!
それと、ノーパンが君の国の文化ならば、それも尊重する事にしようー!」

校長は驚いた表情を浮かべた後、すぐに頬を緩ませ、僕の割れ目に視線を集中させた。
割れ目をジロジロと見られていると、快楽と精液を求めて僕の子宮がうずき始める。
オナニーを我慢して登校していたのだし、折角だからここで欲求不満を解消していくとするか。



僕はそのまま床に座り込み、V字開脚をして、オマンコを見せつけた。
我ながらこの体はとても柔らかく、色々な体位が可能で素晴らしいと思う。

【僕】「我が国では、女性はセックスするほど美しくなるものだという文化があります。

そのため、未婚女性へのレイプは犯罪ではなく、レイプされる事は恥ずかしい事でもありません。したがって、私が学校内外でレイプされていても、警察沙汰にしないで欲しいのですが……」

【校長】「……という事は、ここでワシが君をレイプしても、君の文化的には問題無いという事だね？」

【僕】「はい、そうなりますね」

そんな文化が存在するはずがないが、校長は信じ込んだ。前にさらけ出されたオマンコで、冷静な思考力を失っていたからだ。

校長は僕のオマンコの前に膝をつき、僕のオマンコに手を伸ばす。そのままオマンコを左右に広げて、僕のオマンコをジロジロと眺めはじめた。

【校長】「ほほう、可愛らしい外見に見合わず、

流石にもう処女ではないようだねえ？

初体験はレイプで失ったのかね？」

【僕】「は、はいっ…数人がかりでレイプされました…」

校長は僕の初めてがレイプだった事を知り、

色々妄想を膨らませたのが、さらに興奮し始めた。

校長は執拗に僕のオマンコを広げ、いじくり、観察し、匂った。

【校長】「それでは君のために、校長のワシも肌脱ぐとするか」

校長はそう言って、文字通り服を脱ぎ、ギンギンに勃起するペニスをさらけ出した。

【校長】「どうだ見たまえ、ワシのチンポは立派なものだろう？」

【僕】「は、はいっ……♡」

欲情する子宮に思考を支配されている僕は、そのペニスがから目が離せなくなる。

校長は、もうお爺さんと言っても良い年齢なので、全く期待していなかったのだが、予想に反して、そのペニスは逞しく勃起し、振り返っていた。

【校長】「それではレイプしてあげようね」

【僕】「ゆるっくお願いしますっ♡」

これはレイプではなく合意の上なのでは？ そう思ったがどうでもいい。

今はとにかくペニスと精液が欲しくてたまらなかつたし、あっちもその気なのだから。

【校長】 「アハハハハハハ……」

《ずんずんずんずん……》

【僕】 「ひゅ…… ああああ……♡♡♡♡」

校長のそそり立つペニスが、すっかり濡れて準備が整っている僕のオマンコに、深々と突き刺さった。やっぱりペニスを突っ込まれるのは、オナニーより気持ちいい。

【校長】 「…実を言うと、可愛い生徒を見るたびに、こうしてみたいと思っておったのだよ。」

それがこうして、アルトリア君のような美少女と……」

校長は歓喜していた。 そりゃ、こんな美少女をレイプできれば、男なら本望だろうな。

【校長】「んおおおんんんん〜」

《おはんにー おはんにー》

【僕】「おっ♡ おおおおおおおおおっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

校長は腰を前後に動かし始めた。

しかも、その動きは的確に僕の弱い所を刺激している。

僕を初めてレイプしたチンピラのような、

若さと体力に任せた激しいレイプも良かったが、

テクニクで攻められるのも中々良い物だ。

【僕】「んっ、これ気持ちいいっ♡ やばっ♡」

僕は、無意識に校長のチンポをぎゅうぎゅうに締め付け、奥へと導らるる。



そうして、何回目かの突き上げの後、ついにペニスが最深部に到達した。

《ぬるっ……ぬぶんっ……》

【校長】「…おっ……？ な、なんだこの感触…」

さらに深く突き刺ったような…」

【僕】「ふふっ♡ 僕の子宮の中に入ったんですよ♡」

我が国の女性は、子宮の中にペニスが入るよう、子宮口を開ける訓練をしているんですから♡」

【校長】「し、子宮にペニスが入ったっ……？」

こんな美少女の子宮に、ワシのペニスが……！」

回から出まかせてそんな事を行ってみたが、校長は大興奮だ。

こんな美少女の聖域である子宮に、自分のペニスが入ったのだから当然だろう。

校長はさらに激しく僕の子宮を突き上げ、子宮内部をかき回していく。

【校長】「美少女JKの子宮ー 気持ちSSSSー」

《ぐちゅーーーぐちゅーー》

校長は初めての子宮内挿入に大興奮で、まるで

初めてセックスした若者のように、無我夢中で腰を振る。

もう校長の威厳も、年を重ねたテクニクも関係なかった。

校長のペニスで子宮をかき回される事も気持ちいいのだが、

自分よりも優れた人間を手玉にとっているようで気持ちがいい。

【校長】「ううう…そ、そろそろ出るぞう…！ どうすればいいー」

【僕】「…我が国の文化では、精液は子宮に出すのがマナーです♡

どうぞ、たっぷり中出して下さい♡」

そう言った直後、校長は僕のお尻に腰を密着させ、その欲望を解き放った。

【校長】「出すぞっ……」

《おんおん》

《おんおんおんおん》

【僕】「あひっ♡ ああああああ♡♡♡♡」

ねっとりとした精液が、子宮の中に大量に注ぎ込まれた。同時に、僕は絶頂して、無様なアへ顔を晒した。精液はあっという間に僕の子宮を満たして行き、そしてペニスと膣の隙間と通って、外へとあふれ出した。

【校長】「な、なんてマンコだ……。絞り取られるっ……」

この僕の肉体、ホムンクルスは精液が無ければ生存できない。ならばこそ、「一滴も残らずに搾り取るうとするのは、当然の事だった。」



【僕】「うっっ♡ はあっ♡ はあっ♡」

《「ボォォォン」》

それからしばらく、校長は僕に腰を密着させたまま、全ての精液を吐き出しつくしたのだった。

僕の子宮の中は、校長の新鮮な精液で満たされており、肉体が生命力を得た事と、快楽による絶頂で、僕は多幸福感に満たされ、何も考えられなくなっていた。

【校長】「さ、流石に若い子の締めりは凄いなっ…」

それに子宮に入るとは、恐れ入った…」

校長はそう言いつつペニスを抜き、僕に見せつけた後、その場に座り込む。その直後だった。ガラガラと音を立てて、校長室のドアが開いたのは。

